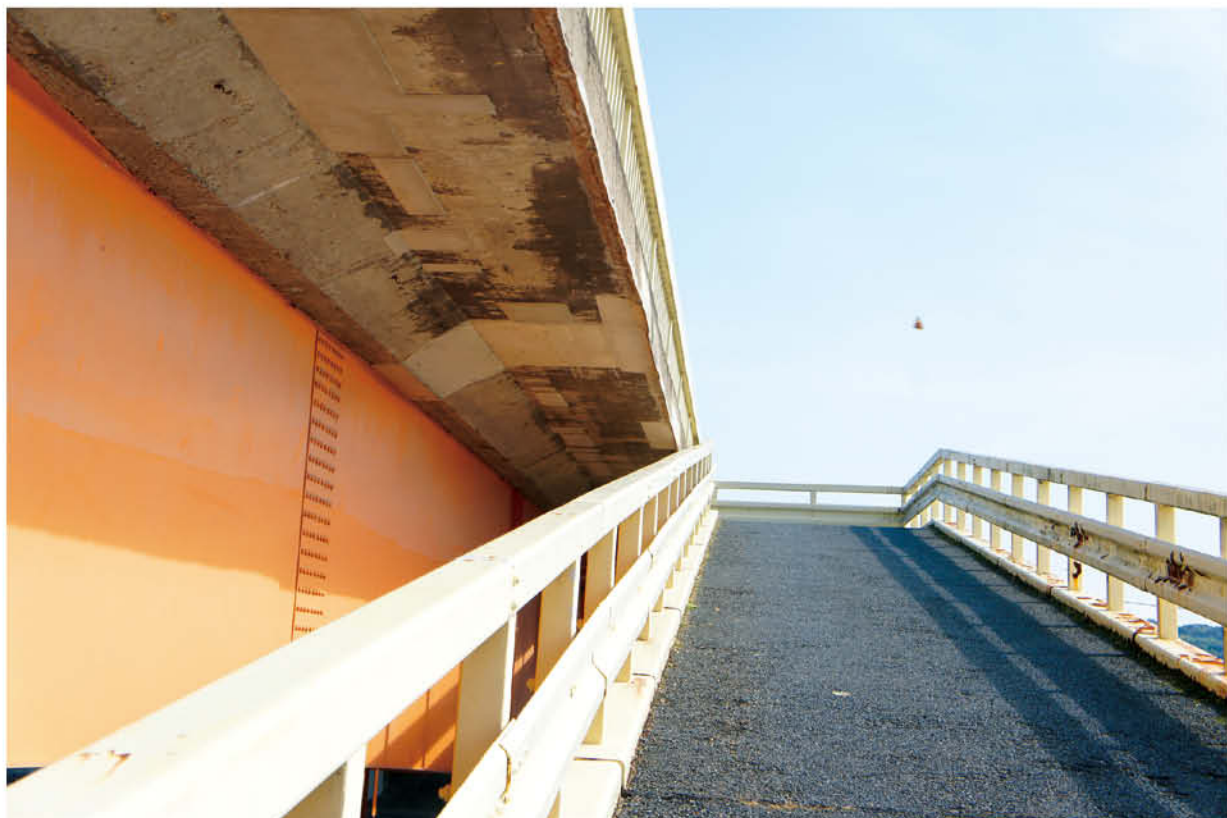


FUEIKI

vol.64



特集

ここからはじまる物語

みるを楽しむ！

アートナビ岡山代表

片山眞理さん

芸術文化と地域づくり

公益財団法人福武教育文化振興財団 理事長 松浦俊明
公益財団法人大原美術館 理事長 大原あかね

故福武純子に代わり
2017年6月の理事会で
松浦俊明が理事長に就任しました。
就任を記念して、
昨年公益財団法人大原美術館の
理事長に就任した大原あかね氏と、
芸術文化と地域づくりについて
語り合っていました。



「不易流行」と5つのミッション

—それぞれの財団について

松浦 地域づくり、人づくりをテーマに、教育と文化の両面から社会課題を解決し地域振興を図ろうとしている財団です。文化芸術の面でいえば、例えば、アーティストの作品制作を支援するというよりは、その作品がどう地域に影響していくかということを重要視し

ています。アーティストが作品を使って地域でワークショップをする活動のように、地域に働きかけるところを応援しています。

設立31年目ですが、初代理事長の谷口澄夫先生の座右の銘「不易流行」変わらないことと、新しいことを取り入れて変えていくことを大切にしています。

大原 大原美術館は2010年、創立80周年のときに使命宣言として5つのミッションを作りました。アートとアーティストに対する使

命、あらゆる「鑑賞者」に対する使命、子どもたちに対する使命、地域に対する使命、日本と世界に対する使命です。このミッションに沿って活動をしていく限り大原の変わらない筋があると思っています。社会情勢が変わる中で、継続していくことはすごく大事で、難しいです。その時の指標になるものが使命宣言です。

85年以上にわたり美術館をやってきた中で、「これは変わってないね」というのが見えるというのは、私としてはやりやすいかなと思います。



松浦俊明(まつうら・としあき)

1981年生まれ。名古屋市出身。岡山市在住。横浜国立大学卒業。横浜国立大学大学院卒業。2006年ヤフー株式会社入社。14年公益財団法人福武教育文化振興財団参与。15年同副理事長。17年6月理事長就任。前任の福武純子の次男。



大原あかね(おおはら・あかね)

1967年生まれ。京都市で育つ。倉敷市在住。一橋大学経済学部卒業。青山学院大学大学院国際政治経済学研究科修了。金融関係の民間研究所勤務を経て2000年から大原美術館理事、11年から専務理事。16年7月理事長就任。前任の大原謙一郎氏の長女。

—これから

松浦 福武教育文化振興財団なので、教育と文化を切り離して考えるのではなく、両面からアプローチして地域を考えていきたいです。岡山は教育文化は魅力的だねと思われるような地域づくり。ゼロから新しいことを考えて活動していくのはハードルが高いので、日本の、海外の良い事例をたくさん見て勉強して、取り込んで、地域に合うようにアレンジしていければいいと思っています。

大原 大原美術館がある、ということが人々の勇気というか元気の素になる、そんな美術館であり続けたいと思っています。そのために、今(その時に)大切なものを常に提示し、それに対して大原美術館として真摯に取り組むというのは、これからもやっていかないといいけないことだと思っています。



ます。

—財団の仕事に対して充実感を感じるときについて

松浦 地域でそれぞれ面白い活動があると思うのですが、財団の助成や表彰を通して、それまでバラバラだったけれども、財団をハブに、大きな活動をしてもらったときには、財団の存在というものを感じます。

大原 大原でレジデンスをしてもらったアーティストがすごく成長できましたと言ってくれたときや、展示場で夏休みの宿題をしている小学生を見て、この風景があるところのも大原のいいところだなと思ったり、日常の端々で感じています。

—ご自身の理事長

像について

松浦 財団の活動に関する経験や知識も少ないので、まだ教えられることが多いですが、その中でも、今までの自分の人生の中で培ってきたことを、岡山がよい環境になるために、県民のために活かしていきたいと思っています。リーダーとして引張っていくというよりは、財団が今までやってきた素晴らしい活動の積み上げをもう少し次世代につなげるような仕組みを作っていきたいです。

大原 「みんなの町にある美術館なんだよ」というものに大原美術館をしていこうと思っています。大原孫三郎は5年で大原美術館を財団にしました。それは公の(みんなのもの)にしたかった孫三郎の願いだと思うので、それをしっかり引き継いで実現させるのが私の理事長としての使命かなと思っています。

課題の解決が財団の存在意義

—芸術文化と地域づくりについて

松浦 文化芸術を通じた社会課題の解決というのは、財団の存在意義そのものだと思います。

大原 具体的には何か働きかけたり、何かのまず。財団が直接、何かをするわけではないですが、世の中には、文化芸術を通じて課題を解決しようとしている人がたくさんいて、その活動の後押しをするのが財団の役割です。そういう芽がどんどん出てくるような地域になるように、今後も引き続き波及効果のある活動をどんどん応援していきたいです。



アートと地域、アートと人、

人と人を結ぶ対話型鑑賞

みるを楽しむ！アートナビ岡山代表

片山眞理さん

美術館に行ったとき、どのように作品を鑑賞していますか？

「みるを楽しむ！アートナビ岡山（みるナビ）」は

鑑賞者と作品を結ぶ対話型鑑賞の普及活動をしています。

対話による作品鑑賞で何がみえてくるのか、

代表の片山眞理さんにお聞きしました。

—対話型鑑賞とは、どのようなものですか？

片山 対話型鑑賞の手法が開発されたアメリカでは「ビジュアル・シンキング（VT）」と呼ばれており、アート作品を見たときの視覚情報をもとに、複数の人の対話により作品の見方を深めていく鑑賞方法です。作品の中の具体的根拠に基づきながら、自分の考えたことを言葉にして他者に伝え、また他の人が言うことを聞いて作品を見、また考えます。

自分の考えだけでなく、他の人の多角的な視点も得ながら、みる、考える、話す、聞く、またみる、また考える、また話す、また聞く、と自分の考えがスパイラルしながら、どんどん変容したり、決定づけられた

特集

ここからはじまる物語



り、時には迷いの境地に陥ったり……。

小さな頃から自分で見て自分で考えて自分で言葉にしてみること、一回でもいいから体験してもらいたいと思っています。同時に、そうした言葉にした自分の意見がみんなに受容されたり、自分と違う意見に耳を傾けなくなる対話の楽しさを体験してもらいたいです。

—出会ったのはいつですか。

片山 2007年だと思いますが、岡山市立美術館で、MITE展がありました。そこで対話型鑑賞のナビゲーターを養成する講座の募集があり、それに応募しました。がっちりナビゲーター養成というカリキュラムを受けて、展示を案内するところまでやりました。それまで、対話型鑑賞など全然知りませんでした。恥ずかしい話、鑑賞していかったというのが正直なところです。養成講座に行つて初めて目から鱗がどさつと落ちたというかこうやって楽しんでいるんだなということを初めてそこで開眼させられました。このときから、はまってしまいました。

—「みるナビ」の活動を始めたきっかけを教えてください。

片山 岡山市立美術館のボランティアとして学校対応や一般の方対象に対話型鑑賞を行っていました。2015年に倉敷市中学校教育研究会美術部会の方から倉敷市立美術館で鑑賞会をやりたいという話をもらいました。そこで、もつと対話型鑑賞を広めるきっかけになればと思い、県立美術館のVT専門班の有志を中心に「みるを楽しむ！アートナビ岡山」という団体を設立しました。

—どのような活動をしていますか？

片山 小・中学校の生徒さんや大学生、一般向け、親子など、その時々

のニーズに合った鑑賞プログラムを美術館と連携しながら行っています。また、岡山市の芸術祭とコラボした鑑賞プログラムの企画実施や、病院や親子クラブなど、美術館外での出前鑑賞会、教員や行政の新人研修なども行いました。その他に、メンバー内のスキルを高める内部研修は頻繁に行っています

—「対話」とはどういうものだと考えていますか？

片山 対話とは多様性を知る楽しさを教えてくれるものです。人の意見を聞いて、違っても楽しい、違うから楽しいみたいなことを気づかせてくれるもので、その中で自分に新しい気づきがあります。ほかの人とそういう体験を共有できる唯一の機会かなと。政治や経済については、そこまではないと思います。アートだからこそ一つの絵を見て、作品を語れるし、面白がることができます。すごく深い対話ができた時には満足感があります。

—やりがいを感じるときは？

片山 中学校で実施したときですが、おとなしいなと思っていた子がいきました。2作目ぐらいからすごく話してくれるようになって、「来月もあるからどうぞ」「お友達も誘って来て」と言ったら、「はい」と言って、次の会は友達を2、3人誘ってきてくれたんです。先生にあとから聞いたら、「あの子の話を初めて聞きました。あんなに話すところを見たことがなかったです」と。たぶんそんなキャラじゃないと思うんです。子どもは、短時間で、すごく変容するんです。

—教育的な側面からのアプローチは考えていますか？

片山 教員研修も含め、児童や生徒、先生に体験してもらいたいです。



中学校の現場では対話型鑑賞は認知されつつあります。しかし、授業でどう活かすという話になると、その先の授業計画が事前に組み立てづらい難しさがあります。何でも言っているという視点は、アクティブラーニングのような、能動的な学びということの一端になると思います。美術館で絵の前には連れて行かれるけれど、そこからは思っていることを言えるんだということを知ってもらいたいです。どんなボールでもつかまえてキャッチするから投げてくださいという気持ちです。

—今後の活動について教えてください。

片山 アート作品は世の中の多様な価値観と新しい可能性を秘めています。やはり、私たちの団体名のとおり「みるを楽しむ」環境や人をたくさん生み出していきたいです。そして、その中から我々のようなアートと人を結び繋ぎ手がどんどん育ってほしいというのが一番の活動の目標です。

片山眞理 (かたやままり)

倉敷市児島出身。東京藝術大学美術学部日本画科卒業。中学校非常勤講師、予備校講師を経て、現在、美術館等の日本画講座で講師を務める。2008年岡山大学大学院教育学研究科に入学し、対話型鑑賞を研究。2010年修了。2015年から「みるを楽しむ！アートナビ岡山」の活動を始め、代表を務める。

Facebook

<https://www.facebook.com/mirunaviokayama/>





エル・グレコ
人気のあるコーヒーと
レアチーズケーキ(ブ
ルーベリーソース)を
ぜひ一度お試しあれ



日米交流150周年記念切手
(2004年日本郵政)

「アメリカで活躍した日本人洋画家」と
して国吉の「カフェ」(1937年、ホイット
ニー美術館蔵)がデザインされている



大原美術館

1945年の傑作「跳び上がろうとする
頭のない馬」は必見



山陽放送(株)

所蔵する数点の国吉
作品のうち、「ウィリア
ム・グロッパの肖像」
(1938年)は、国吉が
親しい友人を描いた
貴重なもの

「ここは私の遊び場」(1947)



和歌山県立近代美術館

この秋、特別展「アメリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎」
展開催(10月7日~12月24日)。和歌山県出身の石垣も、戦前の
アメリカに移住として渡り太平洋戦争という困難な時期をくぐりな
がら画家として活躍した。親交のあった二人の足跡をたどる。

協力: 岡山大学国吉康雄研究寄付講座、クニヨシパートナーズ
国吉祭2017のお問い合わせ先: クニヨシパートナーズ tel086-251-7633
詳細はHPをご覧ください。http://www.yasuo-kuniyoshi-pj.com/

日米交流
150周年記念切手
(2004年)

中国銀行



中国銀行

国吉の油彩「黄色い
服の婦人」(1920年
代)を所蔵

GOAL
国吉祭2017

国吉祭2017

「老いた道化の肖像をめぐる幾つかの懸念」



今年は舞台劇を上演。近未来の世界での
「Mr.Ace」をめぐるドラマを、岡山で一般
公募されたキャストやダンサーも参加して
制作。「老いた道化の肖像をめぐる幾つかの
懸念」11月25日、26日全3回公演。Junko
Fukutake Hall(岡山大学鹿田キャンパス)

ONSAYA鹿田キャンパス店

JunkoFukutakeHallを目的
の前にONSAYAでコーヒータイ
ム。4つのパン屋さんによる4
種類のサンドも必食。

プロモーションドラマ
「国吉康雄を探して」
(製作:岡山市)

プロモーションドラマ
「国吉康雄を探して」
(製作:岡山市)

現代の高校生たちが追い求
めた国吉康雄の姿とは?
才士真司脚本・監督ドラマ、
Youtubeにて発信中



国吉康雄の作品ってどこにあるのかな?
クニヨシガールが探ってみました。
「あがり」の頃には、クニヨシ豆知識がふえるよ!



クニヨシ出会いスゴロク

START

岡山県立美術館



岡山県立美術館

国吉作品をまとめて見るならココ!「祭りは終わった」な
ど所蔵作品や、福武コレクションが随時展示されている



ミュージアムカフェ ちやい夢
注文を受けてから一枚一枚とい
ねいに焼き上げた自慢のワッ
フルとコーヒーが人気

国吉康雄
誕生地記念碑

国吉康雄誕生地記念碑
国吉康雄が生まれ育った、岡
山市北区出石町に建つ記念碑。現
在は一時移動中。金平哲郎氏作

主人公が住むアパ
ートの隣人である写真家の
「ユニオシ」氏は、おそ
らく国吉康雄の名前から
きていると思われる



映画『ティファニーで朝食を』

夢二郷土美術館



café松香

夢二が好んだおしゃ
れなヨーロッパの焼き菓子
"ガルバルディ"

夢二郷土美術館

設立者である松田基氏
は、竹久夢二と同じ岡山
出身の画家として、国吉
康雄の作品も収集して
いた

映画
『ティファニーで
朝食を』



画廊喫茶
くる実

illustration by
RT
Reiko Takeshima

1964年に奉還町で創
業した純喫茶。夏はミ
ルク金時がおすすめ。



画廊喫茶 くる実
国吉が1931年に岡
山に帰郷した際、墨で
描いたブドウの絵が飾
られている



ラボ的食の実験

大月ヒロ子・文



夏のはじめ、留守にしていた玉島のラボに戻ると、あちこちから作物を手にお客様がやって来る。桃、スモモ、枇杷。入れ替わりにラボの畑からは苺、馬鈴薯、玉葱、紫蘇などが旅立っていく。

この時期、畑で採れるのは、ズッキーニ、ミックスサラダ菜、キュウリ、人参、ピーツ、蕪、オクラ、イタリアンパセリ、レモングラス、コリアンダー、トマト、ピーマン、パジル、インゲン、とうもろこし、つるむらさきなど。陸の食べ物他に、海が近いので、魚の類が新鮮で驚くほど安い。スーパーマーケットといえども侮ることなかれ。色物といわれるトロ箱には、半端な雑魚も交えたバリエーション豊かな魚介類が詰まっていて、1箱300円、1500円だ。都会からやってきた人にとっては、腰を抜かすほどの価格であるうえ、見たこともない珍しい魚にテンションは嫌が応にも上がる。もちろん私たち地元民も然り。一緒に買い物に行き、下ごしらえをし、初めての料理にもチャレンジし、みんなで食べる。その頃には、テーブルを囲んでいる人は、ほぼ仲良くなっている。

料理は科学であり、アートでもあり、優れたコミュニケーションツールでもある。さらに、美味しいというご褒美まであるのだからたまらない。玉島には地酒や調味料、加工品も独自の発達をしたものが多く、それも交えれば豊かこのうえない食卓となる。

そんな風集まっては調理し、食べて楽しむことを日常的に行っていると、一緒に旅に

出かけても、つい同じように作ってしまう。カジュアルなゲストハウスにみんな泊まって、近所の市場やスーパーマーケットで未知の食材を買ってきて、付属のキッチンでいつも通り大した打ち合わせもせず、調理し、盛り付け、味わう。今夏もヘルシンキでそのような日々を過ごしてきた。

ラボのワークショップの卵の科学を盛り込んだサイエンスキッチンのシリーズや、鮭とアイヌの文化を学びながらクッキングをするものなどは、多くの人が毎年心待ちにしている定番プログラムだ。興味にまかせてどこまでも奥深く分け入ることのできるのも、食の実験室の魅力だと思う。

そう、先日仲間が差し入れてくれた胡瓜のケーキは、爽やかな香りで、キュウリのコリッとした食感も所々に残った、しっとりしたケーキ。スパイスやピーカンナッツ入りのズッキーニのパウンドケーキよりも、夏らしく、誰もが好きになりそうなケーキだった。

なによりもその実験精神が、新しいコミュニケーションとさらなる好奇心を刺激してくれる。ラボの周りのそんなワクワクに、日々感謝せずにいられない。

おおつき・ひろこ

IDEA R LAB 主宰/家庭や企業から日常的に生み出される廃材を廃棄するのではなく、人の創造性を使って、一点もののアート作品や質の高いプロダクトに生まれ変わらせるクリエイティブ・リユースの先駆者。玉島に開設されたIDEA R LABは日本初のクリエイティブ・リユースの拠点。情報とモノと人とを有機的に結び活用することで創造的循環型社会を目指す。

「ひとつの小さな社会」

私は、祖父母、父母、長兄、次兄、妹の8人家族の中で育ちました。三世代が同居していましたが、家族が「ひとつの小さな社会」という感じでした。家族関係の中に人間関係を見ながら、自分の処し方や居場所、役割を考えているような子どもだったように思います。

祖父と父は対照的で、祖父は県北作州津山で生まれ育ち、父は県南の瀬戸内沿岸の牛窓町で育ちました。職業も祖父は銀行・マスコミ関係といわゆる企業人で、父は一生涯教育者で公務員



自宅の応接間にて家族と親戚(昭和35年)

畑の人でした。母が一人娘だったので、9人兄弟の次男だった父は谷口家に養子として入りました。

5歳年上の長兄と次兄は年子で、年中家の中を走り回り喧嘩をしては祖母に叱られていた記憶があります。4つ下の妹が生まれたときは、私は祖母の部屋で寝起きしていました。小学校に上がると、子どもたちは廊下のふき掃除、父は庭掃除が日課でした。それが終わると皆で朝食をいただきました。バター入りのお味噌汁の味は今でも覚えています。

祖父と父の仕事柄、谷口家はいろんな方たちが出入りをしていました。ミシガン大学日本研究所の岡山分室に父が関わっていたので、来任されたミシガン大学のスタッフとの行き来も多く、我が家でおもてなしをすることもありました。私が高校3年生の夏には、岡山市の姉妹都市サンノゼ市からの交換学生を2週間ほど受け入れました。その時の高校生バティとは、今でも姉妹のように交流しています。

成長するにつれて、自分について回る「谷口さんの娘さん」という言葉が疎ましくなってきました。岡山を離れたかった私は、東京の大学に進み、3年生になると交換学生の試験を受けてサンノゼ市に一年間行きました。その時お世話になったホストファミリーのお母さんが「私たちは、今ここにいる弥生が好きなんだからもっと自信を持って」と言葉をかけてくれました。「谷口さんの娘さん」という呪縛が解けた瞬間でした。大学卒業後は岡山に帰らず、東京で就職し、30代はドイツで過ごしました。しかし、ドイツから日本に帰るとき、40代になっていた私は東京ではなくて、岡山に帰りたいと思いました。家族、岡山、日本を離れて、やっと自分の立ち位置に気付かされたんだと思います。

70代に入った今、実家の片付けに取り掛かっています。たくさん本、研究資料や書簡を片付けながら、初めてじっくりと、父、祖父、家族に向き合っているような気がします。書簡などもこれからゆっくり読んでみたいと思っています。自分の知らない家族の人生と出会うのが楽しみです。(談)

谷口弥生(たにぐち・やよい)

1943年岡山市生まれ。岡山朝日高校―青山学院大学文学部卒業。日本リーダーズダイジェスト社勤務を経て1972年からドイツ(旧西ドイツ)に約10年在住。86年岡山に帰り画廊、音楽会の企画に携わる。89年反アパルトヘイト国際美術展岡山展を組織。その後小ホールでの音楽会企画開催に携わるボランティアグループ「岡山旭川ルネサンス」主宰。祖父久吉は山陽新聞、山陽放送の社長歴任。父澄夫は岡山大学長、兵庫教育大学学長、福武教育文化振興財団初代理事長。

FACE

瀬戸内市立美術館 学芸員

関 洋平さん

「博物館法でいえば、調査と研究、収集と保存、展示と公開、教育と普及が美術館の役割です」と前置きして「地方の美術館に限られるかもしれませんが、つなぐことだと僕は思っています。過去と現在と未来、美術館と地域、作品と人、そして人と人……」公立館の学芸員としては3年目の「新人」関さんが答えてくれた。

関さんの職歴はちよつと変わっている。大学で経済学を学び、民間企業に就職。店舗ディスプレイや商品企画、広報

「美術館の役割ってなに？」

歌手の長瀬剛詩画展や日本画家・加山又造展のような大規模な展示から「せとうちオバケ芸術祭」のようなユニークな展示で、県内外から注目をされている瀬戸内市立美術館。その企画から展示、広報、ブランディングまで手掛けている学芸員の関洋平さんに美術館の役割を伺ってきました。

やマーケティング、美術・文化部門の管理・運営などのキャリアを経て、2015年に瀬戸内市立美術館の学芸員になった。

美術のルーツは祖父だという。両親が共働きだったこともあって、幼い頃からよく遊んでもらっていた。同居していた父方の祖父は、昔ながらのことや、地元の歴史や妖怪話に詳しく、よく話をしてくれ、野山にも連れて行ってくれた。母方の祖父は近くに住んでいて、日本刀や鎧、兜、焼物のコレクターであり研究家だった。美術品の前に正座させられては「お前はこの鎧をどう見る」「怖いです」「どこが怖い」「……赤いところとか、兜の飾りとかが怖いです」という会話がくりひろげられていた。祖父との時間は幼かった関さんの好奇心をくすぐった。そして学芸員になることは祖父との約束でもあった。

就職は学芸員の資格も活かせる文化的な仕事に就きたくて、北大路魯山人の優れたコレクションを所蔵する美術部門もあった和菓子メーカーの源吉兆庵に決めた。「魯山人などの美術品や日本文化の知識を得たことはもちろんですが、会社経営・組織運営の仕組みやブランディングを学べたことが大きな財産となっています」とサラリーマン時代を振り返る。

美術館では民間企業でのキャリアを活かしながら事業計画を練る日々。潤沢な予算はなくて厳しいが、その分、フットワークとネットワークをフルに活用して、魅力的な展覧会にしている。美術館だけではできないことは、アウトソーシングをして外部の専門家に助けてもらうという横断的な考え方も持っている。

「地方の美術館は作家さんから来館者までの顔を見ることがができます。みなさんの反応をダイレクトに感じることがができます。そこが面白い楽しいです」。多忙な日々を過ごす中で、つなぐ、という学芸員の仕事にやりがいを感じている。地元の人に愛される美術館を目指して、奮闘はまだ続く。

関洋平(せきようへい)

1980年生まれ。倉敷市連島出身。県立鴨方高校卒業。愛媛大学法文学部総合政策学科夜間主コース卒業。2002年、株式会社源吉兆庵。2014年、有限会社三蔵農林。2015年、瀬戸内市立美術館。北大路魯山人の芸術、近現代の備前焼が専門。陶芸を中心に近代の文化システムとビジネスモデルが構築されてきた背景を探ると共に、卒業論文のテーマだった「地域のコアとしてのミュージアムの役割」としての地域活性化を实践すべく活動。日本美術史学会会員。「第11回倉敷市民文学賞」童話部門優秀賞。

瀬戸内市立美術館 <http://www.city.setouchi.lg.jp/museum/>

その② …… 申請書作成について

助成金の申請をしたいのですが、申請書はどうやって入手するのですか？

11月になると財団の公式ホームページからダウンロードすることができます。事務局に郵送を依頼することもできます。

申請書など書いたことがないのですが…

まずは、募集要項を熟読し、申請様式を守ってください。募集要項には財団の意図、審査基準などのヒントが盛りだくさんです。記入例を見ていただくと、「こんな書き方をしてほしい」「こういう要素を入れてほしい」という財団の要望もわかってもらえると思います。

活動タイトル名は、どのようにつけたらよいのでしょうか？

例えば、「〇〇商店街の活性化のための△△△△(活動名・イベント名)」のように、目的と活動内容を含むタイトルが分かりやすいです。

特に重要な項目ってどこですか？

「活動の背景」「目的」「実施内容」「期待される成果」でしょうか。助成金で何ができ、それにより何がどう変わるのか、変わる可能性があるのかということが助成財団の関心事です。

収支予算は、おおまかなものでよいですか？

「だいたいこれくらいかかるだろう」という意識ではなく、物品購入や印刷費などは見積りをもって、算出根拠を明確にしていきたいです。

同じ活動を複数の助成金や補助金に申請してもよいのですか？

OKです。複数の助成金に採択されたということは、活動内容が素晴らしいということです。

貼付資料は何をつけたらよいのですか？

申請内容に合わせて、会報誌や新聞掲載記事コピー、活動現場の写真などを貼付してください。貼付資料は自分たちで選ぶことができるので、絶好のPRチャンスです。

実際に書いてみると、不安だな…

募集期間は、12月1日～1月31日(当日消印有効)です。財団では応募希望者の来訪や事前相談を歓迎しています。まずは、お電話ください。

締め切り直前に資料請求、募集要項を熟読しているようでは間に合わないから、前もってスケジュールを組んでおく必要がありますね！

次回は「採択されたら」をお伝えします。

※参照：『助成金応募ガイド』の活用(公益財団法人助成財団センター <http://www.jfc.or.jp/>)

教えて！
財団



道

田中園子



©Hiromi Honda

田中園子

Tanaka Sonoko

写真家/1975年東京都生まれ、岡山市在住。関西学院大学社会学部卒業。2017/アートフェア東京2017 (gallery A-zone booth)、第10回I氏賞選考作品展、2016/「SUMMER 2016」(gallery A-zone)、2014/「PHOTO」(gallery A-zone)、2010/写真集「3DK」刊行、2017/9/16～10/15まで奈義町現代美術館、9/22～10/15まで gallery A-zone にて個展同時開催。

表紙写真：October 25 (2012)

道に迷ったことがある。
曲がり角を間違えたらしく、気がつけば見知らぬ町並みを進んでいた。人通りは少なく、澄みきった秋空の下で家々はひっそりとしていた。住み慣れた岡山市内での、小さな迷子だった。
迷子といえば、4歳くらいだろうか、デパートの紳士服売り場で家族とはぐれ館内放送にお世話になったことがある。長々と続くおとな同士の話が退屈だったので、ワイシャツ、ネクタイと商品を見上げながらウロウロしているうちに迷子になった。気がつけば、ひとりぼっちでグレートのスリッパに囲まれていた。文字とおり目の前は灰色の世界で、たまたま大声で泣いた。
そんなことを思い出すうちに、橋のたもとに出た。自転車をおりて坂道をのぼる。手に自転車の重みがのしかかる。肌が汗で湿り、身体中に息の音が響く。アスファルトを踏みしめる歩を止めて、ふと顔を上げた。道が真っすぐにのびていた。
あの日のデパートでは、笑顔の母が迎えにきてくれた。そして、秋風の気持ち良いこの日は、坂道の先で生涯忘れられない素敵な出会いがあった。この日がなければ、いまの私はいないと思う。

Editor's Column

■野菜づくりをするようになり、気になるのは空模様。今年とはとにかく世界情勢と同じで、安定せず、落ち着かない。■我が畑にも、イノシシが出没するようになり、地面を掘り返す。彼らも必死だから共存するしかないと思うものの、収穫前のサツマイモやカボチャを一夜にしてごっそりやられるとがっくりくる。また今夏は快晴が続かなかった。梅干は三日間連続して干せず、今ひとつの仕上がりが。■それでも、3年目にしてトマトやナスが豊作で、大きな満足を得ている。手間暇かけて育て収穫して食べる喜びは格別である。■自分が育てた気分になっているが、それは生き抜く力をもった種や苗があつてこそ。多少の手助けをただで、その成長をそばで楽しんで見ていただけてとも言える。■そう考えると、野菜づくりは財団の活動と似ている。地域社会という大地、畑に根ざした教育や文化活動を側面から支援し、豊かな成長につなげる。そしてまた畑を耕し、新たな種をまき収穫を繰り返す、結果として土地が豊かになっていく。そんなことを考えながら暑い夏空を見上げた。(O)



公益
財団法人

福武教育文化振興財団

人づくり、地域づくりを応援します

〒700-0807 岡山県岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3階
TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190
URL: <http://www.fukutake.or.jp/ec/>
E-MAIL: eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEKI vol.64 2017.9.25

編集・発行:

公益財団法人福武教育文化振興財団

制作: 株式会社吉備人

デザイン・イラスト: タケシマレイコ

印刷: 株式会社三門印刷所